

# 日本語における名詞を述語にするかたちについて - 日本語教師のための日本語文法をもとめて -

中崎 崇  
城田 俊

## 0. はじめに

日本語教育を行うためには、非日本語母語話者にも日本語母語話者にもわかりやすい文法を新しく組み上げる必要がある。本稿は、中崎・城田 (2017a) (2017b) (2018a) (2018b) (2019) (2020) (2021a) (2021b) に引き続き、日本語教育<sup>1</sup>のための新しい日本語文法教科書の作成を目指して、名詞が述語として用いられる際に、文中においてどのようなかたちをもち、かたちはどのようにつくられるのかということについて検討するものである。以下に記すことは、もちろん試論にすぎない。

## 1. 名詞を述語にするかたち

名詞は、動詞および形容詞と同様に述語になることができる。動詞、イ形容詞はそのままで述語となることができるが、名詞はそのままでは述語として働かず、述語化詞「ダ」の助けを借りてはじめて述語として働くようになる。

(1) 学生 - 僕ハ学生ダ

学生ダッタ

この述語化詞「ダ」は、名詞などの実質的意味を持つ語に付属し、文法上の意味を付け加えて働かせる付属的要素の1つと考えられる。

本稿では、中崎・城田 (2017b) で述べたように、「学生ガ」のような接続を、「学生 (名詞) + ガ (格助詞)」として2語と考え、付属的要素である助詞を1語として認める立場をとる。ただし、名詞が文中で働

くためには、格助詞（ゼロを含む）をとる必要があるという事実にも目を向け、「名詞+ガ/ヲ…（格助詞）」といったまとまりを、名詞の文中でのあり方、つまり、存在形態であるとも考える。

格助詞の場合と同様に、本稿では、「学生ダ」といった連接を、「学生（名詞）+ダ（述語化詞）」として2語と考え、述語化詞を1語として認めつつ、「名詞+ダ（述語化詞）」といったまとまりを1つの名詞の存在形態（名詞の述語形・終止形）であるとも考える。

ただ、助詞と異なり述語化詞は、(2)のように、「ヨ」「ネ」といった終助詞などをともなって、一語文となって文を形成することができ、この点において助詞などの他の付属的要素と大きくことなる。そのため仁田（2000）など、「ダ」を名詞や動詞などと同等の単語として認める立場が存在する。

(2) A：太郎ハ学生ダヨ。

B：ダネ。

述語化詞が品詞の分類としてその名が与えられるとしても、名詞を文法的に働かせるだけの力しかなく、実質的意味を持たない。よって、付属的要素であることに変わりはない。

## 2. ダの語尾変化

「ダ」をとって名詞が述語化したものを述語化名詞と呼ぶ。この述語化名詞には、イ形容詞同様、他に対して働きかけるかたちである「呼び掛け形」をもたない。あるのはI. 言い切るかたち（完結形）のうちで、叙述するかたちの「叙述形」、そのかたちで文を、通常、終結することができず、続ける語形であるII. 接続形のうち、名詞に接続するかたちである「連体接続形」、名詞以外に接続するかたち「連用接続形」、文法上の用法が特定されておらず（特定の用法をもたない語形、つまり不特定な語形）、非常に広汎な機能を持ち、日本語の動詞、形容詞で「原形」とも目されるかたちであるIII. 汎用形（連用形と伝統的に呼ばれる語形）

である。後述するように「汎用形」については「で=<sup>2</sup>de (汎用形1)」と「に=ni (汎用形2)」の2系列存在する。

図1：述語化詞ダの語尾変化

Ⅰ 言い切るかたち (完結形)		Ⅱ 接続するかたち(接続形)						Ⅲ 不特定なかたち	
叙述形		名詞以外に接続するかたち(連用接続形)				名詞に接続するかたち (連体接続形)		「汎用形(連用形)」	
①非過去形	②過去形	③条件形	④前提形	⑤逆接形	⑥例示形	⑦非過去形	⑧過去形	⑨汎用形1	⑩汎用形2
(学生) だ =da	(学生) だった =(dat)ta	(学生) なら(ば) =nara(ba)	(学生) だったら =(dat)tara	(学生) だって =(dat)te	(学生) だったり =(dat)tari	(学生) の =no	(学生) だった =(dat)ta	(学生) で =de	(学生) に =ni

## 2. 1. 中止め用法について

「連用接続形」については、文中での働き（いわゆる統合的 syntagmatic な意味・機能）によっていくつかの形に分けられるが、述語化名詞では③条件形、④前提形、⑤逆接形、⑥例示形のかたちがある。ただし、動詞のテ形「貸してkas-ite」、イ形容詞のクテ形「赤くてaka-kute」にあたる「中止形」は存在しない。「中止形」は「汎用形(連用形1)」である「デ=de」で代用される。

(3) 動詞：学校へ行って／行き、小川先生にあった。

(4) イ形容詞：山は高くして／高く、険しい。

(5) 名詞：この人は学生で、あの人は勤め人だ。

従って、動詞とイ形容詞にあるような中止め用法における、中止形(テ形・クテ形)と「汎用形(連用形)」の対立(主として文体の区別)はなく、「汎用形(連用形)」のみが、中止め用法で用いられる。

## 2. 2. 条件形

条件形は、「ナラバ=naraba」もあるが、バをおとして「ナラ=nara」で用いることもできる。

(6) 学生なら (ば)、学生らしくしなさい。

(7) シャーロック・ホームズのことなら (ば) 彼は何でも知っている。

動詞やイ形容詞の場合、条件形「可能性がアレバ (ar-eba)」「札幌ハ寒ケレバ (samu-kereba)」と接続助詞ナラ「可能性ガアル (現在文) +ナラ (ar-u nara)」「可能性ガアッタ (過去文) +ナラ (atta nara)」「札幌ガ寒イ (現在文) +ナラ (samu-i nara)」「札幌ガ寒カッタ (過去文) +ナラ (samu-katta nara)」の3系列あり、条件形と接続助詞ナラとは明確に区別される。

次の(8)の「ナラ」は、「お金ダッタ (過去文) +ナラ」と考えられ、動詞やイ形容詞の「アッタナラ」「寒カッタナラ」に相当するため、接続助詞である。

(8) これがお金だったなら (ば) うれしいのだ。

ただ、(9)の「ナラ」について((6)(7)についても同様)は、「宝ナラバ (宝=nara (ba))」と「宝 (=daが強制消去された現在文) +nara」の二重の解釈が許容され、外容上の区別は消滅し、その区別は明確ではない。

(9) 子供が宝なら (ば)、大切にしなさい。

### 2. 3. 前提形

動詞「貸シタラ (kas-itarara)」イ形容詞「寒カッタラ (samu-kattara)」の前提形 (タラ形) に対応するのが「ダッタラ=dattara」である。この「ダッタラ=dattara」のダッ datは、名詞に、前提形をつくるタラtaraを接合させるために出現する結合要素と考える。以下に前提形の例をあげる。

(10) これがお金だったらいいのに。

## 2. 4. 逆接形

動詞「貸シタツテ (kas-itatte)」のタツテ形、イ形容詞「寒クタツテ (samu-kutate)」のクタツテ形に対応するのが、逆接形「ダツテ =datte」である。この「ダツテ=datte」のダツ datも、前提形のdatと同様に名詞に、逆接形をつくるテteを接合させるために出現する結合要素と考える。逆接形には「ダツテ=(dat) te」のほかに「ダツタツテ=(dat) [tat] te」というかたちもあるが、俗語的、ないし、誤用とみなされる。

(11) 学生だって、社会のきまりはきちんと守らなければならない。

## 2. 5. 例示形

動詞「貸シタリ (kas-itari)」のタリ形、イ形容詞「寒カッタリ (samu-kattari)」のカッタリ形に対応するのが、例示形「ダツタリ =dattari」である。この「ダツタリ=dattari」のダツ datも、前提形・逆接形のdatと同様に名詞に、例示形をつくるタリtariを接合させるために出現する結合要素と考える。

(12) 昼食は、カレーだったり、オムライスだったりする。

## 2. 6. 連体接続形

述語化詞ダについても、動詞やイ形容詞と同様に、名詞に接続する際非過去形「学生の (=no) 時」、過去形「学生だった (=datta) 時」の2種が認められる。ただ、動詞やイ形容詞の「連体接続形」の過去形、非過去形が、それぞれ「叙述形」の過去形と非過去形と同じ作り方をするのに対し、ダの「連体接続形」の非過去形は、叙述形の非過去形とは異なる作り方をする。

(13) 名詞 (非過去形) : 学生の時、よく渋谷へ行った。

(14) 名詞 (過去形) : 学生だった時、よく渋谷へ行った。

(15) 動詞 (非過去形) : 注射する人は、ここで問診票を書いた。

(16) 動詞 (過去形) : 注射した人は、ここで止血用のガーゼをもらう。

(17) イ形容詞（非過去形）：優しい父親はもういない。

(18) イ形容詞（過去形）：優しくった父親はもういない。

動詞では過去形と非過去形によって、主節が表すとき（主節時）を基準として、動詞が表す事柄の継起順序を表し分ける【順序】といった文法的意味を表し分ける。例えば(16)であれば、従属節の事柄（注射をする）がなりたつのは、主節時（止血用のガーゼをもらうといった事柄がなりたつとき）よりも前であることを表す。(15)であれば、従属節の事柄（注射をする）がなりたつのは、主節時（問診票を書くといった事柄がなりたつとき）よりも後であることを表す。しかし、名詞の場合、(13)と(14)でそのような区別はなく、それぞれの語形は【順序】といった文法的意味を表し分けているわけでないと思われる。<sup>3、4</sup>この点については、(17)と(18)でそのような区別がないイ形容詞の連体接続形と同じである。

## 2. 7. 汎用形（連用形）

「汎用形（連用形）」は2つある。1つは、(19)のように中止の用法で用いたり、(20)のようにアルに結びついて代行結合<sup>5</sup>をつくったりするかたちである。この場合は「汎用形」は「デ（=de）」のかたちをとる。

(19) コノ人ハ学生デ、アノ人ハ勤め人ダ

(20) この人ハ学生デア

もう1つは、(21)(22)のようにナル・スルなどと結びつき、転化（主體または客體の變化の結果）<sup>6</sup>をあらわすかたちである（この場合は主體である息子の變化の結果をあらわす）。この場合は「汎用形」は「ニ（=ni）」のかたちをとる。

(21) 息子が学生ニナツタ

(22) 山田を主任ニスル

「デ」を「汎用形（連用形）1」、「ニ」を「汎用形（連用形）2」と呼ぶことにする。

イ形容詞では、「汎用形（連用形）」1・2の区別がないが、述語化詞には区別が明確にある。

(23) 代行結合：寒ク（ハ）アル samu-ku $\phi$  (wa) ar-u  
学生デ（ハ）アル gakusei=de (wa) ar-u

(24) 転化：寒クナル samu-ku $\phi$  nar-u  
学生ニナル gakusei=ni nar-u

述語化詞ダに「汎用形（連用形）」の1と2を認めるのはほんざつ之感があるが、文法をきちんととらえるためには必要な処置である。

### 3. デアル

デアルを述語化詞（繫辞・存在詞・判定詞等）の1種とする考えもあるが、2. 7. の(23)「学生デ（ハ）アル」で見たように、デアルはダの「汎用形（連用形）1」の「デ（=de）」と補助動詞アル「ar-u」とに分解でき、両者が併さって「代行結合」をなしているものである。

以下の(25)～(28)で示すように、動詞、イ形容詞、ナ形容詞、名詞＋述語化詞等、あらゆる述語になり得る語は、「汎用形（連用形）」と補助動詞によって、「代行結合」を形成し、それが語ないし語結合そのものを代行できる（それぞれの語の語彙的意味に何等変更を加えず、その語を代行できる）ことにおいて共通する。

(25) 動詞： 書ク－書キハスル kak-i $\phi$  (wa) sur-u

(26) イ形容詞：寒イ－寒ク（ハ）アル samu-ku $\phi$  (wa) ar-u

(27) ナ形容詞：静カダ－静カデ（ハ）アル sizuka-de (wa) ar-u

(28) 述語化詞：学生ダ－学生デ（ハ）アル gakusei=de (wa) ar-u

### 4. デス

デス（des-u）についてもデアルと同様に述語化詞（繫辞・存在詞・判定詞等）の1種とする考えもあるが、そのように考えると名詞文のていねいなかたちと、イ形容詞文（ひいては、ナ形容詞文、動詞文）のて

いねいなかたちとの整合的理解が困難になる。

このデスはあくまで、ダロウ、ヨウダ、ラシイ、ニ違イナイ、ソウダ（伝聞）カモシレナイ等と同様に、文の末尾に出現し文全体の中に話し手の態度を入れ込む働きを持つ「述末詞」<sup>7</sup>であると考ええる。具体的には、このデスは、イ形容詞のていねいなかたちに現れるデスと同じであり、文にていねいな態度を込める働きをもつ「述末詞」である。

(29) 今日ハ寒イデス。 samu-i des-u

(30) 昨日は寒カッタデス。 samu-katta des-u

イ形容詞に現れるデスは、語尾助辞、語幹助辞<sup>8</sup>と異なり (29) のような非過去形、(30) のような過去形に後続することができ、自分の前で非過去形と過去形の対立（時制の対立）を許す膠着的付属要素である。

名詞文においてもそのことは同様である。その証拠に、(32) で示すように、述語化詞が過去形（ダッタ=datta）である場合、その後、述末詞デスが登場することがある。この様子はイ形容詞の過去形の場合と全く同じである。

(31) 私ハ学生デス。 gakusei des-u

(32) 私ハ学生ダッタデス。 gakusei=datta des-u

(31) のような非過去形（現在文）の場合、現在文に述末詞デスが後続すると、(33) で示すようにダ (=da) が強制消去される（省略される）と考えられることになる。

(33) 学生ダ（非過去形）+デス → 学生 ダ [→強制消去] +デス  
gakusei=da + des-u → gakusei =da [→φ φ] des-u  
寒イ（非過去形）+デス → 寒イデス  
samu-i + des-u → samu-i desu

つまり、現在文である「学生デス」の中には、「学生ダ」が内包されているのである。

このように考えれば、デスを、名詞につく場合はていねいな態度を込める述語化詞、一方イ形容詞（寒イです）、動詞否定語幹非過去形（書



カナイデスkak·ana-i des-u、デキナイデスdeki·na-i des-u) や過去形(書カナカッタデスkak·ana-katta des-u、デキナカッタデスdeki·na-katta des-u) につく場合はていねいな述末詞である、という複雑な理解(解釈)をせずにすむこととなる。繰り返すが、デスはいかなる場合においても文にていねいな態度を込める述末詞である。

## 5. ダの否定

名詞+ダの否定は、ダ(=da)を「汎用形(連用形)1」であるデ(=de)に立て、ナイ(na-i)を後続させることで表される。

(34) 学生デナイ。 gakusei=de na-i

(35) 男デナイ。 otoko=de na-i

この否定の仕方は、イ形容詞と全く同じである。

(36) 美シクナイ utukusi-ku $\phi$ na-i

イ形容詞の否定に現れるナイna-iは、動詞のナイ·ana-i/·na-i(書かないkak·ana-i、食べないtabe·na-i)が語幹助辞で語幹の一部となるのとは異なり、1個のイ形容詞(補助形容詞)である。その証拠に、(37)のように「汎用形」(連用形)とナイの間にとりたて助詞を入れ込むことができる。<sup>9</sup>

(37) 美シクハナイ utukusi-ku $\phi$ wa na-i

このデに後続するナイについても、(38)のように、「汎用形」(連用形)とナイの間にとりたて助詞を入れ込むことができる。このようにナイとデの間には語幹間隙があり、通常それはとりたて助詞によって占められる。

(38) この人は学生デハナイ。 gakusei=de wa na-i

よって、イ形容詞の否定を行うのが補助形容詞であるなら、このナイも同じく補助形容詞と考えられる。

## 6. まとめ

これまで、名詞が述語化するにあたって、どのようなかたちをとり、そのかたちがどのようにつくられるのかについて検討してきた。確認したように、名詞は、そのまま述語となることができないため、述語として働くため述語化詞「ダ」の助けを借りる。

この述語化詞「ダ」が語尾変化を行い、動詞やイ形容詞と同様に、「完結形（単独で完結している語形）」、「接続形（続ける語形）」、「汎用形（特定の用法をもたない語形）」の大きくわけて3つのかたちをとる。ただ、「完結形」は、動詞の呼び掛け形に対応する形態については存在せず、呼び掛け形をもたない。

「完結形」は、テンス的意味の対立により、①非過去形、②過去形に分けられ、「接続形」は、動詞と同様に、後続する品詞の異なりにより、「連体接続形」と「連用接続形」とに分けられる。ただ、「連体接続形」については、動詞やイ形容詞と同様に、名詞に接続する際⑥非過去形、⑦過去形の2種が認められるが、動詞やイ形容詞と異なり、ダの「連体接続形」の非過去形については、叙述形の非過去形とは異なる作り方をする。またイ形容詞と同様に、その語形の異なりが動詞で見られた【順序】といった意味の表し分けをしているわけではない。

「連用接続形」については、文中での働きにより、③条件形、④前提形、⑤逆接形、のかたちが認められる。

「汎用形（連用形）」は、イ形容詞と異なり、「デ (=de)」のかたちをとって、中止の用法で用いたり、アルに結びついて「代行結合」をつくったりするかたちである⑧「汎用形1」と、「ニ (=ni)」のかたちをとって、ナル・スルなどと結びつき、転化（主体または客体の変化の結果）をあらわすかたちである⑨「汎用形2」の2系統がある。中止形を持たないダは、中止め用法についてはこの「汎用形（連用形）1」である「デ」で代用される。

デアルは述末詞ではなく、ダの「汎用形（連用形）」1の「デ」と補

助動詞アルとが併さって「代行結合」をなしているものであり、デスは述語化詞ではなくあくまでいねいな態度を込める述末詞である。

ダの否定については、ダを「汎用形（連用形）」1であるデ(=de)に立て、補助形容詞のナイを後続させることで表され、この方法がイ形容詞と同じである。

本稿では、形態的には体言（名詞）と考えられるナ形容詞（状詞）については言及ができなかった。このことについては別稿で述べる予定である。

## 7. 参考文献

城田 俊 (1998)『日本語形態論』ひつじ書房

中崎 崇・城田 俊 (2017a)「日本語における語の構成をめぐって－日本語教師のための日本語文法をもとめて－」『就実表現文化』、第11号、pp.1-13、就実表現文化学会

中崎 崇・城田 俊 (2017b)「日本語における語の認定と品詞分類をめぐって－日本語教師のための日本語文法をもとめて－」『就実論叢』、第46号、pp.63-76、就実大学就実短期大学

中崎 崇・城田 俊 (2018a)「日本語における動詞のヨウ形・汎用形（連用形）・連体形の意味用法をめぐって－日本語教師のための日本語文法をもとめて－」『就実表現文化』、第12号、pp.62-45、就実表現文化学会

中崎 崇・城田 俊 (2018b)「日本語における動詞の語形とその作り方をめぐって－日本語教師のための日本語文法をもとめて－」『就実論叢』、第47号、pp.39-55、就実大学就実短期大学

中崎 崇・城田 俊 (2019)「日本語における形容詞の語形とその作り方をめぐって－日本語教師のための日本語文法をもとめて－」『就実論叢』、第48号、pp.43-61、就実大学就実短期大学

中崎 崇・城田 俊 (2020)「日本語における動詞・形容詞の否定のか

- たちについて—日本語教師のための日本語文法をもとめて—」『就実論叢』、第49号、pp.53-71、就実大学就実短期大学
- 中崎 崇・城田 俊 (2021a)「日本語における動詞・形容詞のていねいなかたちの否定について—日本語教師のための日本語文法をもとめて—」、第14号、pp.64-80、就実表現文化学会
- 中崎 崇・城田 俊 (2021b)「日本語における動詞・形容詞のていねいなかたちについて—日本語教師のための日本語文法をもとめて—」『就実論叢』、第50号、就実大学就実短期大学
- 仁田義雄 (2000)「単語と単語の類別」『文の骨格』岩波書店
- 仁田義雄 (2016a)「形容詞文についての覚え書」『文と事態類型を中心に』くろしお出版
- 仁田義雄 (2016b)「名詞文についての覚え書」『文と事態類型を中心に』くろしお出版

---

<sup>1</sup> 本稿での日本語教育とは、日本語非母語話者に対する日本語教育に限らない。日本語母語話者に対する、いわゆる国語教育も含む。以後断らない限り、この意で日本語教育という用語を用いる。また日本語教師についても、非母語話者、母語話者に対する日本語教育を行うものといった意味で用いる。

<sup>2</sup> 動詞や形容詞の語幹と語尾は、それなしにあり得ず、相互依存関係（語幹が語尾を絶対的に予定して存在する関係）にある。こういった関係にある語幹と語尾の間隙は「-」で表す。

看板における「花」「たばこ」の例など、名詞は必ずしも接辞や述語化詞を予定しなくとも存在できる。名詞は接辞や述語化詞に対し相対的独立性を持つ。このような関係にある名詞と述語化詞の間に存在する間隙を「=」で表す。

<sup>3</sup> 連体接続形の非過去形は【順序】だけでなく特定の時制を表さない。(13)

であれば「学生だった時」と解釈され、述語の時制（過去）と同じ時制解釈となる。また「学生の時に、いろいろ苦勞するだろう」であれば、学生となるのは発話時以降（未来）と解釈され、この場合も述語の時制（未来）と同じ時制解釈となる。

<sup>4</sup>(14)の「学生だった時」については、主節時（よく渋谷へ行くといった反復的な事柄がなりたつとき）より前に、話し手が学生といった属性を有していたことを表しているわけではない。この場合は、発話時以前（過去）のある時期に話し手にその属性が存在していたことを表してに過ぎない。

<sup>5</sup>代行結合とは、動詞では「書キハスル」(kak-i $\phi$  wa su-ru)のような汎用形（連用形）にスルを結合させた形のことを指す。動詞では補助動詞がスルであるのに対し、形容詞ではアルが用いられる。詳しくは中崎・城田（2018a）を参照されたい。

<sup>6</sup>この場合の「学生ニ」「主任ニ」は、ナル／スルという動詞の支配に応じて文中に現れる必須の補充成分（必須補語）であり、動詞の表す動作の様子、様態を表す任意の要素である修飾語ではないことに注意されたい。

<sup>7</sup>述末詞については中崎・城田（2017b）を参照されたい。

<sup>8</sup>語幹助辞とは、屈折要素（助辞）の1種で、語幹に融接して新たな文法上の語幹を形成する助辞のことをさす。書カセル／タベサセル (kak·ase-ru/tabe·sase-ru) 書カレル／タベラレル (kak·are-ru/tabe·rare-ru) などにおける下線部が語幹助辞である。

<sup>9</sup>イ形容詞のナイと異なり、動詞のナイ・ana-i/·na-iの前にはとりたて助詞を置くことはできない。例：\*書かはない \*書きはない (kak-i $\phi$  wa·na-i) \*食べはない (tabe- $\phi$  wa·na-i) 動詞の否定形はナイを含んだかたちで1語と考えられる。

就実表現文化

第十六号(通巻第42号)(非売品)

令和四年一月二十七日 印刷

令和四年一月三十一日 発行

編集兼 就実大 学  
発行者 表現文化学会

〒538-5606 岡山市中区西川原一丁目一

電話〇八六二七一一八一(代)

印刷所 旭総合印刷株式会社

〒760-0606 岡山市北区内山下二丁目〇一三

電話〇八六三三三二一三三三二(代)